

氏名	帆 莉 基 生
学位	博士 (文学)
学位記番号	博日乙 第10号
学位授与の日付	2023年 3 月 4 日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	石川淳戦後小説研究——<歴史>と<近代>を問う 石川淳の一九五〇年代～一九八〇年代 A study of Ishikawa Jun 's Postwar Novel— Interrogating "History" and "Modernity" Ishikawa Jun 's 1950s -1980s
論文審査委員	主 査 教 授 片 山 宏 行 副 査 教 授 佐 藤 泉 副 査 教 授 小 松 靖 彦 副 査 愛知県立大学准教授 若 松 伸 哉

論 文 の 内 容 の 要 旨

帆 莉 基 生

□本論の目的

本論は、石川淳が敗戦後から一九八〇年代までに発表した小説を中心的な対象として論じるものである。戦後、社会が変容していく中、また文学の、とりわけ〈純文学〉の枠組みが問い直されていく。石川淳の小説はそれとどのように向き合っているかを明らかにすることで、戦後文学を中心とした日本近現代文学史、ならびに戦後文化史を問い直す契機になることを目的とする。

石川淳は、一八九九 (明治三二) 年に東京で生まれ、一九八七 (昭和六二) 年に亡くなる。文学活動は長期に及ぶ。一九三七 (昭和一二) 年「普賢」で第四回の芥川賞を受賞するが、一九三八 (昭和一三) 年「マルスの歌」が、反軍的とされ発禁処分を受け、戦時下では目立った文学活動を避けた。敗戦の翌年一九四六 (昭和二一) 年「焼

跡のイエス」で文学活動を再開し、太宰治や坂口安吾らとともに〈無頼派〉〈新戯作派〉と称される。七〇歳を超えた一九七一（昭和四六）年から九年間をかけて集英社の文芸誌『すばる』誌上にて長編小説「狂風記」を連載し、その後八八歳で亡くなるまで小説を書き続けた。

戦後、年下の太宰治や坂口安吾等とともに〈無頼派〉と称された石川淳だが、他の〈無頼派〉の作家達が早世していくなかで、〈無頼派〉の生き残りとして、また〈最後の文人〉として文壇内や文学愛好家に高く評価をされている。

しかしその一方で、小説についてもその他文学活動全体についても、石川淳は近現代文学研究であまり扱われていない。また当初石川が論じられる際には、「精神の運動」という石川本人がたびたび用いていた言葉で、個々の小説を細かく論じるよりも、石川淳の文学的営為の中に「精神の運動」が行われていると讃えることに帰着してしまっていた。こうして石川淳を近現代文学史上における〈特異〉な作家として位置づけ、その〈特異〉性を追認し賞賛するという形で論じられてきたといえる。特に一九五〇年代には井澤義雄、菅野昭正などフランス文学出身の文芸評論家が石川淳を積極的に評価し、フランスの象徴詩と対照しながら、石川淳の小説は、世俗から切り離された、自律した物語世界が構築されていると高く評価した。こうして石川淳は世俗から離れた〈特異〉な孤高の作家、〈最後の文人〉として高く評価されることになったのである。

しかしこうした石川淳への賛辞が、むしろ石川淳を同時代の諸現象と照応するのを避け、日本近現代文学史のさまざまな試みの流れの中から切り離してしまい、結果的に日本近現代文学研究の中から石川淳が取り残されてしまった一因になったのではないか。

その後文芸文化史という観点から野口武彦『石川淳論』一九六九）、や鈴木貞美（『昭和文学のために』一九八九）などが石川の文学活動を位置づけようと試み、それを継承する形で、個々の小説を同時代の諸言説や諸事象に照らし合わせながら、石川淳の文学的営為に迫ろうという研究がなされた。近年では山口俊雄（『石川淳作品研究』二〇〇五）、若松伸哉（『わたしと世界を象ることば』二〇一九）などがその代表として挙げられる。しかしこれらの諸研究が中心としているのは、石川の文学活動の前半と言える一九四〇年代までであり、戦後、特に一九五〇年代以降に関しては多くの余白が残されている。

上記先行研究に加えて特筆したいことがある。一九五〇年代ではフランス文学出身の文芸評論家から評価された石川淳であるが、一九七〇年代後半から八〇年代にかけ

て〈江戸〉との関連性から論じられるようになる。例えば花田清輝（『日本のルネッサンス人』一九七五）や、八〇年代以降に起きた江戸ブームの中で脚光を浴びた論客である田中優子（『江戸の想像力』一九八六）がそれにあたる。彼らは石川淳と〈江戸〉の関連性を指摘し、石川の戦中に書いた評論「江戸人の発想法について」の中に近代的な思考からこぼれ落ちてしまったものを鋭く指し示していると高く評価している。また言うまでもなく野口武彦も近世文学の研究者である。

いずれにしろ一九三〇年代から一九八〇年代後半に至る石川淳の長期にわたる文学活動の全貌が捉えがたく、石川淳の小説を始めとした諸テキストが近現代文学研究の中から取り残されてしまっている現状がある。

そこで本論では、まだまとまった研究がなく、多くの余白が残されている、石川淳の戦後の小説を主な対象とする。孤高の〈最後の文人〉と称された石川淳を、同時代の諸現象・諸言説と照応させることで、戦後社会が変容する中で、それとどのように向き合っていたのかを明らかにする。

石川淳と〈江戸〉の関わりについて指摘した評があることは前述したとおりだが、石川淳自身が、「江戸人の発想法について」を書いた戦時中を振り返って、江戸に留学したと語っている。その〈江戸〉留学体験が、戦後になって石川の小説の中に活かされていくことを、先に石川と〈江戸〉の関わりを指摘した論者を継承しつつ、石川淳の〈江戸〉への関心が〈歴史〉や〈近代〉そのものを問う、根源的な問いが含まれていたことを明らかにしていきたい。それを明らかにすることは江戸以前と切断することで説明されてきた日本近現代文学史を見直す契機になることにもつながると考えている。

以上本論では、石川淳の戦後の小説の試みを考察することで、従来の〈近代〉や〈近代文学〉の枠組みを新しく捉え直すことにつなげることを目指すものである。

□時代設定

本論で中心的に論じる時代は敗戦後から一九八〇年代の後半までである。

戦後の〈焼跡〉から文学活動を再開させた石川淳は〈無頼派〉の一人とされた。〈焼跡〉はすべてが滅びた絶望の経験であると同時に、絶望の淵から這い上がる、スタートラインとして捉えられた。他の〈無頼派〉の作家同様に、敗戦からの戦後復興は既成の秩序がすべて滅びた中で新たな歩みを始める、再始動の時期であるが、石川淳にとってこの〈焼跡〉はそこから出発していくというものではなく、むしろ〈焼跡〉に

踏みとどまるように、イメージが後に度々用いられることになる。

しかしすべて滅びたはずの〈既成の存在〉が、戦後の国際状況の変化に伴って、再び息を吹き返すいわゆる〈逆コース〉の時代を迎えることになる。石川は現実社会を変革する〈革命〉をモチーフにした小説を連続して書くことになるが、一九五〇年代半ばを過ぎて現代を舞台にした小説を書くことをやめ、歴史的空間を素材にした小説を書くことになる。

この石川の変化を杉浦晋(「石川淳『鷹』試論—二つの「鳩」と「鷹」をめぐる試み—」『国語と国文学』二〇一一年一月)などは、社会状況や国際的な体制の変化から、現実社会での革命を夢見ることが諦めた石川が歴史的空間によく言えば韜晦(悪く言えば逃避)して言ったと論じるわけだが、本論では歴史的空間に小説の舞台を変えた石川の試みを積極的に評価していく。なぜなら、一九五〇年代は〈歴史〉が問い直され、また大きな歴史の中に埋もれていた〈民衆〉の存在が浮かび上がってきた時期だからである。国民的歴史学運動など同時代の状況に石川淳がいかに呼応していたかを見ていくことで、〈歴史〉の諸相と向き合おうとしていた姿が明らかになるだろう。

六〇年安保改定の後、アメリカの傘下に組み込まれた日本は国際的な枠組みの中での立ち位置が固まっていく。また戦後復興から高度成長の中で所得倍増を代表とする「成長と安定の物語」を歩み始め、大阪万博のスローガンの「人類の進歩と調和」のように社会は変革することよりも安住することを求めていく。しかし一見戦争の傷跡も消え、「成長と安定の物語」を順調に歩んでいるようにみえる社会の中には多くの歪みや亀裂が走っていた。その亀裂に焦点を当てたのが松本清張や水上勉といった社会派推理小説の代表的な作家たちただだろう。このような状況に石川淳はどのようなスタンスをとりながら向き合ったのか。一九六〇年代から晩年の一九八〇年代まで石川は長編小説を書いていく。これらの多くは歴史的空間を舞台として、〈歴史〉そのものを問い直すものとなっている。そこには安丸良夫をはじめとした〈民衆史〉の研究成果からの影響もうかがえる。なぜこのような時期に、また長編小説としてこれらが書かれたのか、同時代状況を参照しつつ考察していく。

本論で扱う約四〇年間は、戦後社会が変容してだけでなく、文学のあり方も問われていく時期であった。〈文学〉の側から見ればこの四〇年間は衰退の過程であったとも言えるのかもしれない。「純文学変質論争」を始め従来の文学の枠組みが大きな変化にさらされていく。〈文学〉がかつての立場や影響力を落としていく一方で、漫画や雑誌文化、テレビを中心とした映像文化が人々の間に浸透し、影響力を持っていく。

しかし一九六〇年代から試みる石川淳の長編小説から眺めてみると、別のものが見えてくる。長編小説「狂風記」は一九七一年から九年間に及んで集英社が発刊した『すばる』に連載される。一九二六年に小学館より娯楽部門として分離して設立された集英社は、戦後になって雑誌・コミックを核にして急速に発展する。一九六〇年代から文芸部門にも事業を広げ、文芸書や美術書を出版していく。漫画やファッション誌の成功を元手に一九七〇年に季刊誌として文芸誌『すばる』が創刊され石川淳が招かれることになる。〈文学〉の変質や終焉が議論されていく時代に、出版社の戦略として、一流総合出版社の条件とされた文芸部門の充実を目指して、集英社は看板として文芸雑誌を立ち上げることになり石川淳が用いられた。これは〈文学〉の衰退期とされる時期に、むしろ〈文学〉を掲げるような動きも見えるのである。石川淳はこのような状況を好機と捉え利用して、「狂風記」をはじめとして晩年の長編小説を書いていったことがうかがえる。

□本論の内容

第一部「〈焼跡〉に踏みとどまること」では、石川淳が文学活動を開始する大正期から、戦中の〈江戸留学〉、そして戦後〈焼跡〉からの再始動について論じた。父の逮捕と家計の困窮という事態が、石川淳に進路変更を余儀なくさせたが、結果的にこのことが文学活動へと本格的な舵を切らせることになる。また戦時下において、「マルスの歌」の弾圧により、時局を表現することが困難になった時、石川は〈江戸留学〉と呼ぶ、江戸文芸の世界に沈潜する経験をする。そしてそれを「江戸人の発想法について」にまとめた。このこと自体が『萬葉集』全盛の時代に、批評的意味があった。しかしそれだけに留まらず、「江戸人の発想法」を学ぶことで、後の石川淳の戦後小説にもつながる「見立て」や「やつし」の技法を習得することになった。また近代的な発想にはないものを、「江戸人」から見出すことで、もう一つの〈近代〉のあり方を模索するきっかけを与えた。この戦時下の〈江戸留学〉が戦後の活発な文学活動を下支えするものとなったと言えるだろう。だからこそ敗戦直後に、浮浪児に「クリスト」の姿を幻視する「焼跡のイエス」のような小説を書くことが出来たのだった。戦後の〈焼跡〉から文学活動を再開させて石川淳は〈無頼派〉の一人とされる。〈焼跡〉は絶望の経験であると同時に、絶望の淵から這い上がる、スタートラインとも捉えられた。しかし「焼跡のイエス」で描かれる〈焼跡〉は単純な出発ではない。むしろこの敗戦からの戦後復興にむかう秩序と秩序の〈隙間〉の時間は既成の権力がすべて滅びた時であ

り、石川にとってはこの〈間〉の〈焼跡〉を踏みとどまる場として捉え、以後イメージとして用いられることになる。第一部では、困窮、弾圧、敗戦という負の経験をして満身創痍になった〈焼跡〉から立ち上がり、そしてそこに踏みとどまって、立ち続ける、石川の戦後小説で描かれるものの予兆が示されることを論じた。〈焼跡〉を「千載一遇」のチャンスと捉え、文学活動の原点として、戦後小説群の中にそのイメージが結実されていく。

第二部「パロディの批評性」では、戦中の〈江戸留学〉から学んだパロディの技法について論じた。オリジナルのものこそ独創性があり、芸術的価値が高いとされる近代芸術の規準の中では、パロディは低く扱われる。従来石川淳の小説の中でもパロディ小説は、余技の書き物のような扱いを受け、代表作として挙げられることがなかった。しかし後に集英社文庫の『おとしばなし集』としてまとめられる石川淳のパロディ小説群をまとめて見てみると、新たな論点が見えてくる。本論で明らかにしたことは、実はパロディの技法こそが、〈江戸留学〉で石川が学んだことであり、五〇年代後半から書かれる〈歴史〉を問い直すことをモチーフとしている小説は、〈歴史〉をパロディにしたものだとも言え、戦前・戦後の石川淳の文学活動を繋ぐものであるという点だ。その試みが後の長編小説にも繋がっていく。そう考えると五〇年代のまとまった時期に石川がパロディを盛んに書いていたことがいかに重要なことかを本論では論じた。またこれらのパロディが書かれた時期は、戦後社会や政治体制がさまざまに蠢く時であった。「天皇の人間宣言」や沖縄の占領の継続、東西冷戦体制が確立していく中での日本の国際的位置取り、そして経済成長の始まり、こういった同時代の状況を見据えていることが見えてくる。しかしそれをあくまで〈物語空間〉に落とし込んで描き出す、このような技術が磨かれることになり、後の長編小説へと繋がっていくのだ。本論では石川のパロディ小説の巧みさとその魅力を明らかにした。

第三部「〈忘却〉の拒絶」では、一九五〇年代半ば書かれた石川淳の代表作の一つである「紫苑物語」とその周辺について論じた。今まで現実社会からは隔絶されたものとして評価されてきた「紫苑物語」を中心とする一九五〇年代後半に書かれてきた短・中編小説に共通しているモチーフが、〈忘却〉の拒絶であるということを明らかにした。「もはや戦後ではない」という言葉に代表される、戦後復興から高度成長へとつながる時、〈焼跡〉が経済成長の中で覆い隠されていくように、過去を〈忘却〉し、「安定と成長」の物語に安住しようと、記憶と〈歴史〉がさまざまな場で〈忘却〉され、場合によっては改竄されていく。そのような状況の中で〈忘却〉しないことを描くこと

で、高度成長に踊る同時代に対峙していたことを論じた。まさに第一部で論じたように、〈焼跡〉に踏みとどまる姿がイメージとして継承されていくのが、この時期の小説であったと言えるだろう。

第四部「偽史への転換」で、〈忘却〉の拒絶がモチーフにされる時代を経ることで、権力による歴史が〈忘却〉され改竄される、歴史修正主義をテーマにしたものが書かれていくことに着目した。その転換に「新釈古事記」で、石川自身の解釈・解説を入れながら「古事記」を現代語訳する経験が大きく影響していることを考察した。「古事記」をただ現代語訳するだけでなく、時の権力者の操作の形跡をも読み込むことで、権力によって編纂された歴史を疑う姿勢が示される。これは後の長編小説にも継承されていくことを論じた。「新釈古事記」を経て、「八幡縁起」では権力者によって〈忘却〉させられていった出来事の裏側には何があったのかを描く、偽史がモチーフとされている。また石川が権力者によって編纂された〈歴史〉の裏側に関心を持つ背景には、国民的歴史学運動などの当時の、〈歴史〉の中に潜む民衆に目を向ける文化運動に影響を受けていたからだということを明らかにした。また「修羅」では権力者が〈改竄〉した歴史を、焼き尽くし〈奪還〉していく姿が描かれる。これらの小説は具体的な時代や場所が定められていくことで、〈史実〉とされることと小説で描かれることが参照可能な形で描かれる。歴史的空間が舞台とされ、偽史が素材とされる小説ではあるが、実は同時代の諸現象と照応することで、批評的なねらいが明らかになることを論じた。また司馬遼太郎のような実証史学を補完するような歴小説とも、松本清張のように実証史学の定説を疑い、歴史の隠された真実を描くという姿勢の小説とも違う、石川の〈偽史〉の小説が持つ、遊戯であるからこそ持ち得る批評性について論じた。第五部「〈歴史〉と〈近代〉を問う」では、石川の晩年の長編小説群を扱った。さまざまな文学論争が起き、〈文学〉の枠組みが変容していく、一九六〇年代から一九八〇年代に書かれた石川淳の長編小説を論じることで、文学のみならず戦後文化・現代文化の変容の様相を考察した。六〇年代は、六〇年安保の自動締結に象徴されるように、日本はアメリカの傘下に組み込まれるという国際的な枠組みの中での立ち位置が固まり、敗戦後から五〇年代の蠢きを失っていく。一方高度成長による「成長と安定の物語」に安住し、〈焼跡〉も消え、安定しながら順調に歩んでいるように一見思われていた。しかし社会の中には多くの歪みや亀裂が走っていた。このような状況の中で石川淳は〈現在〉が立つ土台の〈歴史〉そのものを問い直すと同時に、日本の〈近代〉の歩みをも問い直す小説を描いていく。幕末の隠れキリシタンが革命を

起こすことを模索する「至福千年」では、明治政府史観の中で語られる維新の志士たちが切り拓いた近代という視点からは抜け落ちてしまう、市井の底辺の人々の中にある変革を求める胎動を描いていく。そこには国民的歴史学運動をもとに発展した〈民衆史〉の研究成果からの影響がうかがえることを明らかにした。長編小説「狂風記」は、文学の変質や終焉が議論されていく時代に、集英社の戦略として文芸雑誌を立ち上げ、破格の待遇で石川淳が招かれることになった。石川淳はこのような状況を好機と捉え利用して、「狂風記」をはじめとした晩年の長編小説を書いていく。戦後派の作家は〈全体小説〉を提唱し、様々な実験的な長篇小説を書くことに意欲的であったが、石川の「狂風記」は〈総合小説〉と呼ばれるもので、従来の文学活動の総決算としてさまざまなものを注ぎ込む場が与えられたことを明らかにした。ここには石川が戦時下の〈江戸留学〉、そして敗戦後の〈焼跡〉の経験、そしてパロディの手法を援用しながら描かれていく。近代とは名も無き群衆から、ひとりの個人的主体を持った存在という人間観が確立した時代であり、そして個人的主体をもった国民が国家を形成していくという、近代の個人観や国民国家としての意識が芽生えた時代として捉えられている。そして過去・現在・未来と均質に流れて行く時間は不可逆的なものであるという合理的精神に支えられている。しかし「狂風記」を始めとした石川の長編小説群は、〈近代〉や〈近代文学〉を支えてきた理念を問い直すもので、近代社会や近代国家が支えてきた言説が揺さぶられていくものであることを明らかにした。太宰治、坂口安吾等とともに〈無頼派〉〈新戯作派〉とされた石川淳は、他の作家が世を去る中、ひとり一九八〇年代まで生き残った。戦後社会が変容し、また〈文学〉の枠組みも変わっていく中、石川淳の戦後小説群は、〈無頼派〉〈戦後派〉と称された時に〈焼跡〉に対峙していたのと同じように、一九八〇年代に至っても、敗戦後の〈焼跡〉に向き合った意識が継承され、既成の秩序や権威に対して常に対峙し続けたということを論じた。それでは〈焼跡〉に対峙し続けることで、石川淳の戦後小説は何を見出したのだろうか。それは「狂風記」で描かれたように、ひとつひとつの出来事や、一人一人の個人は切り離されたものではなく、他者とつながり、過去や未来ともつながる、重層的な存在であるということだ。そこには、〈近代〉や従来の近代文学の概念が見落としてきた、〈可能性〉を見ることができると明らかにした。

審査の結果の要旨

帆苺基生氏の博士学位申請論文の題目は「石川淳戦後小説研究——〈歴史〉と〈近代〉を問う・石川淳の一九五〇年代～一九八〇年代」である。本論文は四〇〇字詰め原稿用紙換算五一八枚（一八八三六文字）で、全五部、十四章からなる。一部書下ろしを含むが、ほぼ審査を受け公表された論文によっている。

本論は日本近現代史文学史において、終戦後に「無頼派」として定位され、その後の長きにわたる文学活動が十分に検討されてきたとはいえない石川淳の〈戦後〉の創作活動を中心に考察し、絶対的な自由を抑圧する権力と為政者、そこから紡ぎ出される歴史に対して、石川がさまざまな文学的抵抗と批判を続けた軌跡を丹念に検証したものである。

以下、部立にしたがって要旨を紹介する。

第一部 〈焼跡〉に踏みとどまること（大正期～敗戦直後）

ここでは戦時下における『萬葉集』ブームがナショナリズムを後押しするものであったとし、これに石川が「江戸人の発想法について」で江戸の狂歌を対峙させたとする。すなわち正岡子規らが称揚した『萬葉集』の「素直」なる精神に対し、趣向・技巧をこらした江戸の俳諧における「俗化」こそがむしろ近代を先取りしているとするのである。ここに帆苺氏は「公定ナショナリズムが作り上げてきた日本の〈近代〉にはない」「パロディ」の精神に石川の創作姿勢が顕著に変化していくと見る。

また「焼跡のイエス」については、襲ってきた浮浪児に、「救いのメッセージ」をもたらす「キリスト」＝救世主の姿を「わたし」は幻視するが、それは「〈焼跡〉の現実」に「踏みとどまること」を「わたし」に刻印することであって、天皇の人間宣言や歴史の再出発と解釈してきた大方の論に異を唱える。

第二部 パロディの批評性（一九四〇年代末～五〇年代半ば）

この時期、石川は「おとしばなし」の題のもとに多くの作品を書いているが、いずれも既成の〈物語〉をパロディ化したものである。『おとしばなし集』として後にまとめられるが、従来看過されてきたこれら一群の作品を帆苺氏は「遊びによる抵抗」として再評価する。

なかでも「和唐内」（一九五〇・六）は「国姓爺合戦」の後日談ともいべきもので、

戦のあとに大国の蚤となって生きるより、一旗揚げのため北方の志士になって「平和のためのいくさ」を決意した和唐内が、甘輝とともに画策するが、あきれた錦祥女がいくさを嫌がる庶民たちを引き連れ、軍資金を根こそぎ奪い取って姿を消す、という話である。

この間に太平洋戦争の結末、基本的人権の問題、中国の分裂、戦争の大義名分といった同時代的問題が軽妙にかつあからさまに批判される。

その他「アルプスの少女」(一九五二・一一)もまた、童話のパロディでありながら同時代状況を見据え、講和・独立の名のもとで進められる隷属化や、<象徴>たる天皇、あるいは天皇制が、<主体>無き存在であり、それを仰ぐかぎりには<自立>は不可能であるという強烈なアイロニーが込められていることを指摘する。

第三部<忘却。の拒絶 (一九五〇年代半ば)

ここでは「灰色のマント」(一九五六・二)と「紫苑物語」(一九五六・七)に通底するモチーフを探る。戦後経済が復調を見せ、マイホーム生活を楽しんでいるサラリーマン「又一」の平穏な日常に、灰色の将校マントを羽織った男が訪ねてきて、「一三年前の日曜日を忘れたか」と又一に問う。それは戦地において又一が少女を殺害した日であった。又一は「現在生きている自分」を心のよりどころとして、娘の死はもはや「錯覚」にすぎないと記憶の彼方へ押しやる。が、男は再び現れる。又一は小銭をやって追いかおうとするが、男のその手は又一の手であった。忘却の中にかき消されようとする少女の死は、戦場の記憶を背負い続けていたもう一人の又一に逆襲されるのである。帆苺氏はもはや戦後ではないという朝鮮特需を背景としたつかの間の安逸の中で、過去を忘却することに強い抵抗を示し、過去を記憶することに強くこだわった石川の姿勢が見て取れるとする。

このことは歴史的空間に舞台を設けた「紫苑物語」にも窺うことが出来る。平太は山里の平穏な生活を乱す侵入者を殺害した後に「わすれ草」を植えて、あらゆる忌むべきことを<忘却>する。一方宗頼は殺した者たちが流した血のあとに「紫苑」を植え、その死と行為を<記憶>しようとする。話の末尾は<わすれない>という宗頼の妄執が平太も館もすべてを滅ぼし、紫苑が一面に広がるのであった。

設定された時間枠は異なるが、<忘却>を拒絶し、<記憶>を抱えていきっていくという主題において両作品は、発表された時期もふくめて、同じ視野の中にとらえて論じるべきであろうというのが帆苺氏の提言である。

第四部 偽史への転換（一九五〇年代後半）

石川は一九五〇年代後半から〈歴史〉を題材にしながら、それを改変していく〈偽史〉と呼ばれる歴史贋造の小説を書くようになる。帆苺氏はその発端を「新釈古事記」（一九六〇刊）に見、その現代語訳の作業の中に批評と創作が交錯して、石川に新たな小説創作の機運をあたえたと指摘する。すなわち、注釈をつけるという営為と、そこで生ずる発想が小説へと転換する原動力になったのではないかと考えるのである。さらに引き続き書かれた「八幡縁起」（一九五八・三）、「修羅」（一九五八・七）はその延長線上に書かれたものと見通している。外発的な要因としてはすでに種々な方面から意見が上がっていた「国民文学論」の動きがある。『古事記』に関して言えば、戦時中の取り扱い方を無反省に繰り返すのは、当時の皇民化教育の風潮に逆戻りしかねない。そうしたなか石川の『新釈古事記』は『古事記』のなかでは〈神〉としてあがめられている存在が、支配権力の座にいる〈人〉によってつごうよく作り出されたものであり、〈歴史〉もまた彼らとその正当性をプロパガンダするものとして書かれたものだと言及する。さらにこの単なる現代語訳を超えた、批評と創作が交錯する場合は、その後の正史を否定する偽史の小説へと継承されるとする。

『八幡縁起』（一九五八・三）は古代、平安中期、南北朝時代を舞台に「名もなき大神」が〈武の神〉「八幡」として祀られ、やがて高師直によって焼き払われるまでを描くが、帆苺氏は創作の背景に同時代の〈紀元節復活論議〉を重ね、同じく正当な歴史編纂へのアイロニーを見る。また自分たちの〈今〉の正当性を構築しようとする権力者に対し、本作品では「木地師」一族を外部に置いて〈今〉と〈末〉を意識する存在がこれを相対化させているとし、歴史の固定化・完成化を拒絶していると指摘する。

『修羅』（一九五八・七）ではさらにこの〈外部〉に追いやられた者が一族をあげて、一条兼良の館の文庫に蔵された「この国の史を編むに足るといひつたえたる」「旧記」に火を放ち逆襲する話となる。そして本作の創作背景に、日米安保改定を控えた警職法改正法案の目論見と廃案という同時代状況があったことに留意すべきことを帆苺氏は喚起する。

第五部 もう一つの〈近代〉を問う（一九六〇年代～八〇年代）

「至福千年」（一九六五・一～一九六六・一〇）は一八五八年（安政五年）から一八六四年（元治元年）の幕末の騒乱を背景に、安政の大獄から長州征伐などの史実を取り込みつつ、その裏側で二組の隠れキリシタンの集団が暗躍・暗闘していた話が

語られる。正史から取りこぼされた人々が、実は維新の志士や朝廷勢力といった表舞台とは別に、虎視眈々と自らの千年王国の創建を企てていたという内容は、「修羅」でのテーマを一步進めるとともに、時あたかも「明治百年」をあらたなく国家の物語として政治利用しようとする政府への牽制と、さらには石川自身の想起する「もう一つの〈近代〉」への可能性が描かれていたと帆苺氏は述べる。すなわち、物語はけっきょく維新の志士たちも隠れキリシタンたちも〈革命〉の道具にされ滅び去り、残った者は乞食と民衆ばかりであったが、この名もなき人々が〈ええじゃないか〉の狂乱に興じてゆく〈群運動〉の姿にありえたかもしれない別の近代の可能性を石川は重ねていたのではないかとするのである。

「狂風記」(一九七一・二～一九八〇・四)は、井伊直弼の家臣長野主膳と主膳の愛妾村山たか女のそれぞれ末裔であるマゴとヒメが主人公である。彼女らは祖先伝来の怨念を現行秩序に対して抱いており、そうした歴史の暗部を蔵した地底世界と一九七〇年代の現代日本とを自在に往還して巨大な政治悪に戦いを挑むという話である。帆苺氏は本作をたんに時代諷刺の点においてのみ評価するのではなく、末尾に記された「千年まえの世界に立ちかえるとは、千年後の世界の幕をあけるのにひとしい」という言葉から、過去・現在・未来を切り分けるのではなく、ひとつなぎにつながっているという発想を重視する。すなわちこの作品は、単純に過去の悪者を怨霊の力によって倒し、もとの地位を奪還する話ではなく、〈歴史〉あるいは〈群衆〉の中にある〈自分〉を、〈個別なもの〉ではなく〈重層的な存在〉として受け入れるというメッセージが込められていると見るのである。

さらにこの発想はさかのぼって戦中に書かれた石川の「江戸人の発想法」にすでに示されており、ことに天明狂歌における反近代的姿勢、すなわち切り離された〈個人〉としての自己同一性から解放され、人々との「つながり」の運動の中に自己を埋没させることが、かえって一人の人間を際立たせることになるという先行論の指摘をふまえつつ、帆苺氏はあらためて「至福千年」に描かれた〈群衆の運動〉に、個人が集団のなかにかき消されるのではなく、むしろ一人一人が人々とのつながりと歴史の連環のなかで、自らの存在とその意義を見出すことを示唆しているとするのである。

以上、述べてきたように、帆苺氏の論文は、これまで歴史への逃避として看過されがちであった石川淳の戦後を中心とした創作活動が、同時代状況と鋭く共振し、権威

と歴史への批判と可能性を示唆した、文字通り現代を衝く文学的営為であったことを明らかにした。

ここでは十分に紹介できなかったが、論証は時代的トピックを的確に押さえ、原資料の検証も丁寧におこない、先行論への目配りも怠りなく、また出版ジャーナリズムの動向や新聞雑誌広告の類にまで探索の手を伸ばすなど行き届いており、そこから導かれた結論はいずれも大いに説得力を持つものであった。文章は平明達意、氏の長年の表現練磨のほどがうかがえた。

石川における「精神の運動」とはなにか。〈政治と文学〉の問題など、根本的な論点は多々残されているが、氏の研鑽が石川淳研究の新たな鉦脈を開削したことを確認するとともに、その真摯な研究姿勢が、今後の日本近現代文学の視野を大いに広げ、さらなる成果をもたらしてくれることを期待したい。

以上の見解から、審査員一同は帆苺基生氏の論文が博士の学位を授与されるにふさわしいものと判定する。